

令和7年度 (宮城県立古川支援) 学校の研究概要 ～令和8年1月末現在～

運営委員氏名 (松尾 行正)

研究テーマ	生きる力を育むための自立活動の工夫 ～自立活動の指導の充実に向けたシステム作りを目指して～
研究目標	1 特別支援教育における自立活動の意義や学習指導要領における考え方について理解を深め、児童生徒の学習上又は生活上の課題の克服を図る。 2 自立活動の個別の指導計画の様式を整え、児童生徒の実態把握と課題の整理、具体的な指導内容の決定、評価の流れの共通理解と効果的な実践を図る。
研究の方法	・学習指導要領自立活動編で、自立活動の基本的な考え方や流れ図の内容を全体で確認する。 ・自立活動の個別の指導計画作成のための年間のスケジュールを明示する。 ・新しい自立活動の個別の指導計画の様式を整える。具体的な指導内容ごとの評価や引き継ぎ事項を書けるようにすることで、活用できる資料にする。 ・自立活動の個別の指導計画作成の話合いが実際にどのように行われるかを、研究部員で実演する(デモンストレーション)→個別の指導計画作成マニュアルを作り、校内研究後も話し合いの流れを確認できるようにする。 ・各教師が、担当の生徒1名の個別の指導計画を作成(昨年度)→全児童生徒が新様式での作成(今年度) ・教師間での話し合いの日(年間で6日間)、実践を知る機会(年間3～4回)を設ける。 ・自立活動の指導について悩んでいる教師を抽出し、グループでアドバイスをする機会を作る。
○研究の成果と ●課題	○自立活動の共通理解が進んだ。 ○デモンストレーションやマニュアルで自立活動の話合いが分かりやすくなった。 ○教務部と連携し、話し合いのための時間を確保し、年間のスケジュールを作ることができた。 ○一人で悩んで個別の指導計画を作り、指導するより、担任間で実態把握から話し合って計画を立て、共通理解しながら指導をした方が、児童生徒の成長のためになると実践をとおして感じた教師が増えた。 ○6月、8月、12月に話し合いの時間を設定したことで、指導を振り返り、年度内に指導の改善が図れたという教師が多かった。 ●教師の入れ替わりが多いので、2年目以降に実践的な内容に偏りすぎてはならなかった。毎年基本的な考え方を確認する機会が必要だった。 ●学級によって、個別の指導計画の完成度に差があり、目標と具体的な指導内容の関連が曖昧な指導計画が多かった。 ●新しい様式について、各学部主事や教務部でどこまで確認するのか、どのように確認するのかについて検討する必要があった。